

所属・資格 地理学科・教授

申請者氏名 江口 誠一

研究課題		地域的な過去の景観復原
報告の概要	研究目的 および 研究概要	国内の地域的な植生変遷は、低地域で調査されていることが多く、台地上は調査例が少ない。データ集積としては、地域間を比較する上で不十分な状況である。そこで、局所的な植生復原に適した植物珪酸体分析によって、調査地を違えてデータを蓄積することで、その地域の特徴を捉えながら縄文時代以降の植生変遷を明らかにする。そして、他に産出する植物化石や動物化石の組成と比較することで、より詳細な古環境の復原を目指し、グローバルな中での位置づけを可能にする。具体的には、調査地の植生を始めとした環境調査を行い、地下の地層を解析した上で、層準ごとに含まれる植物珪酸体化石によって古植生を復原する。
	研究 の 結果	東京都北区の武蔵野台地東部四谷一丁目南遺跡において調査・分析した。江戸城外堀普請が完成した寛永13年の盛り土を除去した後に、近世初期の耕作遺構面が広く認められ、その構成層を対象としたC~F地点および壁面露頭G地点にて、層相観察するとともに植物珪酸体分析用の試料を採取した。C~F地点は何れも江戸時代初期遺構面の1点のみで、層相はそれぞれの地点で試料C、D、Eは暗褐色シルト質細砂炭化物含む、試料Fは褐色シルト質細砂炭化物含むであった。G地点では、試料Gaが26.8mで暗青灰色有機質シルト高師小僧含み、その土壌有機物の放射性炭素年代が $1,700 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料Gbは27.0mで暗青灰色有機質シルト高師小僧含むであった。産出した植物珪酸体化石についてC~F地点では、イネ（泡状細胞）がF以外産出し、イネ（短細胞）とヒエ属はE、スゲ属はDでそれぞれみられた。G地点については、昨年報告のA、BのIV帯と同様で、イネ、スゲ属、ヨシ属、シバ属などが産出し、イネとスゲ属で組織状の珪酸体がみられた。
	研究 の 考察 ・ 反省	江戸時代初期の遺構面においては、中央小谷の南西側斜面の畑跡で、水田面での産出量の目途となる5,000個/gの地点があるなどイネが多産した。また、湿性植物を含むヒエ属やスゲ属なども産出したことから、水域に近い場所での畑による陸稲栽培がおこなわれていたと推定される。このことは、当地から数km内の四谷一丁目遺跡や市谷柳町遺跡において、それぞれ近世の黒ボク土よりイネ属やシバ属などが産出したことから、台地上での陸稲栽培の広がりが見受けられる。以上の様な成果を踏まえた上で今後も、黒ボク土層上に築かれた近世初期遺構の空間的同位層準について、武蔵野地域における縄文時代以降のとくに台地上の植生景観を明らかにし、人為的活動の影響として土地利用の実態について関連する分野の知見を収集・検討し議論を深める予定である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 日本哺乳類学会、ニホンジカの歯石を対象とした植物珪酸体分析の試み、令和6年9月7日、兵庫県立大学。	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	日本地理学会、武蔵野台地上の東京都四谷一丁目南遺跡から得られた過去の植生景観、令和6年9月15日、南山大学。 日本植生史学会、カンボジア北西部の土壌層から産出した植物珪酸体化石群、令和6年12月8日、学習院女子大学。 日本植生史学会、秋吉台西縁の鳴滝地区における堆積物中の植物珪酸体化石群、令和6年12月8日、学習院女子大学。	

※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。